

沖縄の戦後史を知らずして戦後の日本は語れない (その2)

—— 構造的沖縄差別を考える ——

5. 戦後史、ふたつの側面

(今回は学習かわら版NO6号で間があいてしまいました。)

戦後日本の歴史を語る文化知識人は数多くいます。そしておおむね、戦後の廃墟から立ち上がり勤勉な国民は高度経済成長を成し遂げ、繁栄な日本を築いてきた。その背景には戦争の悲惨な国民的体験から平和の大切さを噛みしめ新しい憲法を産みだし守ってきたことにある、ということが基本に据えられているように思われます。この事自体は間違いではありませんが戦後日本史を合理的に説明・解釈するには不十分であり、物事には両面がありもう一方の側面を見なければいけないと主張したのが、中野好夫(故人)と新崎盛暉でありました。彼らの考えは以下のようなものでした。

戦後、平和憲法の下で発展・繁栄してきた本土。しかし、もう一つの面がある。本土の「繁栄」とは裏腹に沖縄をアメリカの軍事的植民地の下に置き、県民の苦難のあゆみがあったことを忘れてはならない。いわば沖縄の犠牲の上に本土の戦後史が成り立っている、という。

そしてその事を論及するためには戦後史においては「本土と沖縄との結び目、結節点においてとらえる」(『沖縄問題20年』) また、「沖縄戦後史と本土戦後史を統一的に把握する視点」(『沖縄戦後史』) が欠かせないと強調しました。そして「沖縄戦後史は、日本戦後史の虚構を写し出す鏡であるといえる」とまで言い切ります。

二人はこの事を1960年代の始めから沖縄県民の闘う立場にたって論及してきました。しかし残念なことにこのような立場、考え方をもち文化知識人が全くと言っていいほど出てこなかった。さて、中野は故人となりましたが、二人が本土と沖縄の統一的に把握しようとした結論はどんなものだったのだろうか。

6. 新崎盛暉著 『沖縄現代史』 (2005年)

「米軍政下(占領時代)にあっても、47都道府県のひとつになっても(本土復帰後)、沖縄現代史を貫いているのは、構造的沖縄差別の上に成立する日米安保体制(日米同盟)と沖縄民衆との闘いであった。そのことがはっきりと実感できたのは、1995年秋以降(少女暴行事件)の闘いの渦中においてであった」と。「構造的沖縄差別」というのは難しい含蓄に富んだ言葉ですが、先に進みながら理解していきます。

7. 中村政則著 『戦後史』 (2005年)

つぎに沖縄と本土の関係について中村が述べている所を長くなりますが引用してみます。

「沖縄についても、本土との違い、差別は歴然としている。大田昌秀、新崎盛暉らが、つとにしているところであるが、本土の平和主義、民主化は、実は沖縄に軍事基地が置かれることにより始めて可能となった。1947年6月27日、マッカーサーは東京を訪問したアメリカ記者団と会談し、沖縄人は日本人でないから、基地を置いても反対する日本人(本土の)は少ないだろうと言い、「沖縄を米軍基地とすることは日本の安全を保障する」と述べた。つまりマッカーサーにとって沖縄の分離軍事支配と第9条による軍備放棄は一体不可分の関係にあったのである。また、憲法学者の古関彰一は、45年12月の衆議院選挙法の改正により、朝鮮人・台湾人とともに沖縄県民の選挙権が停止されていたことを明らかにした。したがって沖縄県民は憲法制定会議(第90帝国議会)に一人の代表も送り込むことはできなかった。要するに、象徴天皇・第9条・沖縄の軍事基地化は、まさに三位一体の関係にあったのであって、沖縄の視点を欠落させた憲法論議は、重大な陥穽に陥っていると言わざるをえない」と。

近現代史の第一人者の中村をして、中野・新崎が問題提起してからあまりにも遅きに失した45年目の論述です。

8. 新崎盛暉著 『構造的沖縄差別』 (2012年)

① 「「構造的沖縄差別」に即していえば、日本、米国、沖縄、基地などさまざまな要素が織りなす構造において、沖縄への基地押付を中心とする差別的仕組みは、日米安保体制維持のための不可欠の要素とされてきた」と。

② 「オスプレイの配備でも・・・沖縄へは猛反対の声があがっても配備を強行しようとする。首相や閣僚は来沖するたびに「沖縄の民意に耳を傾ける」と口にするが、耳を傾けるふりはしても、実行することはない。こうした政治の現実に対して、沖縄では、多くの人が「(構造的)差別」という表現を使わざるを得なくなっているである」と。

③ そして、「沖縄占領後は米軍が血を流したこの島を手放したくないという感情も強まったであろう。こうして、象徴天皇制、日本の非武装化、沖縄の(分離)軍事支配は、占領政策の上で、

三位一体の関係になったのである。構造的沖縄差別の上に成り立つ対米従属の日米関係は、ここから始まる」と結論づけました。

9. 構造的沖縄差別を克服する道

では、構造的沖縄差別を克服するにはその可能性をどこに見出すのかと新崎は自ら問いただしていきます。具体的には「辺野古と高江」のたたかいを例にあげていきます。

① 辺野古でのたたかいでは、04年4月19日、防衛施設庁は沖合2キロに基地建設のために檣を建てた。この檣に約1年、昼夜たがわず連日24時間体制で座り込んだ。このたたかいは組織や団体の動員ではなく、自分の健康や生活条件に合わせて参加した地元の人びとであった。「辺野古の闘いは「個の志の集合体によって支えられた徹底的な非暴力実力闘争」であった」と特徴をづけます。

② また、東村高江ヘリパットにたたかいでは、07年に防衛庁が工事を行なおうとした時住民は猛反対した。しかし、人口わずか60世帯、百数十人の過疎の村で立ちあがった住民は10数世帯でたたかいは続いている、と指摘します。

③ 新崎はいう。「この闘いの背景には、統計的数字の上ではコンマ以下の人たちの目に見えない繋がりがあった。その広がりには沖縄をはるかに越えていた。沖縄だけでこの闘いを貫徹できたのだろうか。漁船を借り上げるだけでも莫大な経費が必要である。この闘いは、世論調査の数字や選挙結果に表れることはない統計の上では、コンマ以下の人たちの、しかし広大な広がりによって支えられていた。」 「ヤマトを含む外部の人間が存在しなければ、これだけの闘いは、あり得なかっただろう。・・・それは、沖縄とヤマトの境を超えた人間と人間の連帯である」と言います。

④ また、11年5月には野田総理が出席する国連総会にむけてニューヨークタイムズの電子版に意見広告を出した。それは全米だけでなく100カ国以上から、100万件以上のアクセスがあったという。まさに運動が構造的変化しているように思えます。

⑤ 新崎は結論づけていう。「沖縄の軍事基地は、東アジアに、台頭する中国と、覇権の維持を図るアメリカが日韓を従える形の国家間の緊張状態が生ずることを前提に存在する。東アジアに、国境を越えた民衆の交流と相互理解を深めることは、そうした前提を不断に突き崩す役割を担っている」と。

以上「構造的沖縄差別」を引用文で説明してきました。

歴史的に形成された本土の沖縄差別意識と米国の世界軍事戦略が本土の「民主化・繁栄」と引き換えになった。このことを理解することが沖縄問題を考える上で大切だと思います。(つづく)

キューバ横断友好の旅 (2014.1/17~25) その3

見たもの、聞いたもの、感じたことをありのままに

ひたちなか平和の会 辻井英雄

- スルーのガイドさんは現職の大学准教授で、日本語観光ガイドが少ないため、今回の私たちのツアーに駆り出されたようだ。ガイドさんが時たま夫に言われることは「あなたは人生で2つ大きな幸せを得た。一つは私(夫)を伴侶に選んだこと、二つ目は日本語を選択したこと」だとか。ガイドさんは大学でロシア語を教えていてソ連崩壊により職を失ったが、大学の計らいで給料をそのまま貰いながら日本語を学ぶことができたとのこと。日本(人)の好きなところを聞くと、「自然を愛している国民、例えば桜、紅葉にとっても感動。そして日本はきれいで清潔な国。駅のトイレのきれいなのはびっくり」。感心しないところは「実際に何を考えているのか分からない点、例えば“いいです”には困ります」。ガイドさんは仕事で日本に数か月滞在の経験がある。ハバナ地域担当のガイドさんは、初めて日本人ツアーをガイドしたが仕事しやすい、時間とおだし。ラテン系やイタリア人とは大違い、時間に遅れるし...
- ハバナ国際空港国内線のトイレを使ったが、困ったことに水が出ない。しばらくハンドル押していたらチョロチョロと出てきたが大勢に影響なし。トイレは使用したトイレットペーパーをそのまま流す場合とボックスに入れる場合とある。入口で担当(店番?)の女の人に使用料として気持ち5セント置いてきた。国内線出発ターミナルのエレベーターが動いていなかった。飛行機に乗ると機内にハエが2~3匹飛んでいた。
- キューバは葉巻の産地だが、たばこを吸っているキューバ人はまずいない。“火を貸して”などと言いたいものなら“健康に悪いよ”と返ってくる。
- 入国審査時、手続きが終わるまでに約一時間も並ばされた。日本では考えられない。パスポートにキューバ入出国の印が無い。(入国時、別カードに印を押してもらい、それを出国時に置いていく)何故だかは分からない。
- 世界的に有名なダンス・音楽ショー「トロピカーナ・ディナーショー」を観た。カストロやゲバラはこのショーを観たらどう思うのか、『まっ、いいか』ってとこかな?
*フランスのムーランルージュ、アメリカのラスベガス、そしてキューバのこのショーが「世界の3大ショー」とか?
- 旅行中ずっと好天気で快適・15~25°Cで空っとしている。街道沿いの桜のような木の名は『メキシカンオーク』。

- カナダのトロントで成田行に乗り換え、機内で日本の新聞を見つけたとたん、現実?に戻った。日付変更線(アラスカとロシアの境界付近)の近くで出た軽食は日清のカップヌードルだった。食べるのは何十年ぶりだろう。

◆社会主義をめざすキューバ共和国

(スルーガイドさんの別れの挨拶より)

革命を愛しています。特に教育・医療はすばらしい。ソ連社会主義国(そう表現した)のようにならないよう、党が(国民に対しての)意識改革・向上に絶えず力を入れる

必要があります。『時代と共に前進を』そう考える人を育てないと国(革命)がストップしてしまいます。キューバは今、社会主義政権が社会主義的システムを駆使してよりよき社会主義をめざしてがんばっています。これからのキューバを見守って下さい。

≪参考までに...「日本共産党第26大会決議」から抜粋≫

“社会主義をめざす国々に”が、社会の発展段階ではなお途上国に属しながらも、世界の政治と経済に占める比重は、年々大きくなるもので、いやおうなしに資本主義国との対比がためされるようになっている。「人民が主人公」という精神が現実の社会生活、政治生活にどれ

- だけ生きているか
- ・経済政策の上で人民の生活の向上がどれだけ優先的な課題になっているか
- ・人権と自由の拡大にむけて、自身が認めた国際規範にそくした努力がなされているか
- ・国際活動で覇権主義を許さない世界秩序の確立にどれだけ真剣に取り組んでいるか
- ・核兵器廃絶、地球温暖化などの人類的課題の解決にどれだけ積極的役割を果しているか

私たちは、これらの問題について、中国やベトナム、キューバが、資本主義国との対比において、「社会主義をめざす新しい探求が開始」された国ならではの先駆性を発揮することを、心から願うものである。(了)

キューバからニカラグア そしてコンタドーラへ

キューバでカストロがバチスタ独裁政権を倒したのが1959年。61年には米国に支援された反革命軍の上陸作戦を粉砕、社会主義国を宣言。そして、ボルヘヤオルテガがキューバで軍事訓練を受けサンディニスタ民族解放戦線(FSLN)を結成したのも同じ年。70~73年にはチリ人民連合政府・社会主義政権の樹立とその崩壊の歴史的経験を学び、79年にFSLNがソモサ独裁政権を打倒。第二にキューバを目指すニカラグアはアメリカと真向勝負。レーガン政権はコントラを組織し内戦勃発。ニカラグア疲弊しFSLN苦境に陥る。

ここで、親米政権のメキシコ、コロンビア、ベネゼエラ、パナマの四カ国のコンタドーラ・グループが登場(東南アジア諸国連合もベトナム戦争中の76年に反共五カ国で発足)、内戦の和平に奮闘。その趣旨は「ラテンアメリカの紛争はラテンアメリカ自身の力で解決する」というもの。

このグループは中米五カ国外相会議などを頻繁に開催、さらにはブラジル、ペルー、アルゼンチンなど18カ国でリオ・グループを結成し和平に奮闘。紆余曲折を経て88年サンディニスタ政権はコントラと和平協定を結び内戦終結。そして90年に民主的な選挙を実施。だれもがオルテガ率いるサンディニスタ党が大勝利すると思っていた。しかし勝ったのは親米のチャモロ候補だった。軍事力を持っていたオルテガは政権を平和移譲。そうさせたのは「和平」を実現させた中南米諸国平和勢力。そして06年16年ぶりにオルテガが大統領に当選、サンディニスタ政権が復活。その後コンタドーラ・グループ、リオ・グループは発展的解消。そして、2011年、33カ国で中南米・カリブ諸国連合が誕生。

カストロ武装闘争から出発・独裁政権打倒・内乱・経済疲弊・政権の平和移譲・そして平和革命で復活。武力革命から平和革命への見事な飛躍。軍事的解決から平和解決が世界の潮流を示した。

冷戦終結後、そして米国が単独覇権主義の酔っている間に、ヨーロッパで、アジアで、ラテンアメリカで軍事力でなく平和的・話し合いを優先する「地域主義」が創造されているのが現在の特徴です。改めて学習していきたいと思います。(伊達)

茨城県平和委員会 学習かわら版 No. 12

平和かわら版 No684(2014.4.25号)別刷り

学習運動委員会責任者: 川又 俊水

学習かわら版担当: 伊達 郷右衛門